長崎県美術館

Nagasaki Prefectural Art Museum

所在地/長崎県長崎市出島町2-1

建築主/長崎県

設計者/株式会社 日本設計

株式会社 隈研吾建築都市設計事務所

施工者/大成建設株式会社

株式会社 梅村組

松島建設工業株式会社

竣工日/2005年2月28日

Location / Nagasaki-city, Nagasaki Prefecture

Owner / Nagasaki Prefecture

Architects / Nihon Sekkei, Inc.

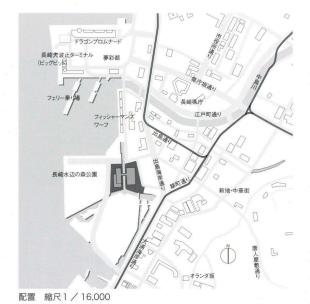
Kengo Kuma & Associates

Contractors / Taisei Corporation

Umemuragumi Co., Ltd

Matsushima Construction Co., Ltd

Completion Date / February 28, 2005





美術館南側より見る View from the south of museum building.



美術館棟よりエントランスホールを見る。真ん中には出島運河が流れる Entrance hall view from museum building. Between two buildings, the Dejima canal flows.

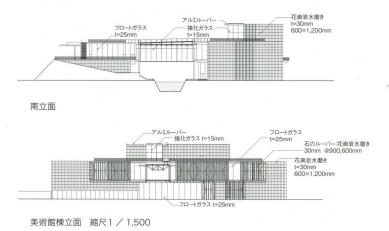
66



県民ギャラリー前の「風の回廊」 Corridor in front of citizen gallery.



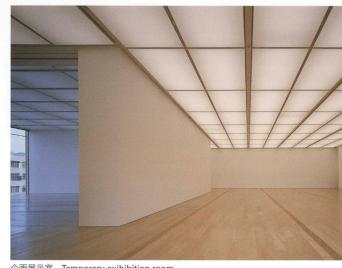
エントランスホール Entrance hall.



断面 縮尺1/1,500



常設展示室 Parmanent exihibition room.



企画展示室 Temporary exihibition room.

栗生明 Akira Kuryu 細田雅春 Masaharu Hosoda 服部紀和 Norikazu Hattori

建築概要

敷地面積 12,679.64m² 建築面積 6,248.31m²

延床面積 9,898.07m² (駐車場を除く)

階数 地上3階

構造 ギャラリー棟:鉄骨鉄筋コンクリート造 PC・ PS造 鉄骨造 美術館棟:鉄筋コンクリート造 PC・

PS造 橋の回廊:鉄骨造

施工期間 2003年4月~2005年2月 (外構工事を含む)

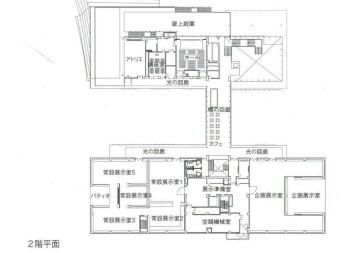
仕上げ概要 -外部仕上げ

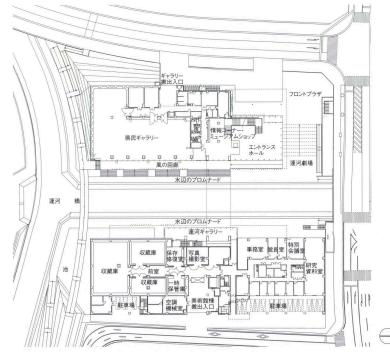
屋上/緑化:良質畑土50%+天然軽石20%+完熟 バーク20% 特殊泥炭質土10% 植栽: ヘデラヘリッ クス シバ トップライト:高断熱複層ガラス トップラ イト アルミ蓋パネル t=3.0mm フッ素樹脂メタリック 焼付塗装 橋の回廊屋根/溶融亜鉛メッキステンレス 鋼板 t=0.4mm 竪はぜ葺 @325mm ゴムアスルー フィング t=2.0mm 高圧木毛セメント板 t=20mm ビーズ発泡ポリスチレン板 t=90mm 木毛セメント板 t=40mm 外壁/花崗岩 t=30mm 水磨き ルー バー/花崗岩 t=30mm 水磨き 取付下地鉄骨/熱 押出し型材溶融亜鉛メッキ処理の上フッ素樹脂常温乾 燥塗装 ガラスカーテンウォール 強化ガラス t=15mm 断熱フィルム貼り ハイブリッドグラサード工 法 フロートガラス t=25mm 断熱フィルム貼り 開口 部/ステンレスサッシ オートドア ガラリ:アルミサッ シ 外構/植栽:シマトネリコ クルメツツジ オカメ ザサ 舗床:600×300mm 花崗岩 t=30mm 同ピン コロ 110×110×110mm

内部仕上げ

[エントランスホール] 床/花崗岩 t=30mm 水磨き仕上げ 300×600mm 壁/ガラスカーテンウォール 花崗岩 t=30mm 水磨き仕上げ 600×1,200mm 天井/アルミルーバー 50×500mm @400mmフッ素樹脂焼付メタリック塗装 [常設展示室] 床/タモフローリング t=15mm 下地ベニア t=15+15mm 壁/LGS下地調湿ボード t=12+12mm ガラスクロスEP 天然木練付複層板 t=9mm 天井/アルミルーバー240×65mm @300mmの上 天然木突板t=0.4mm 鉄骨下地SOP [企画展示室・県民ギャラリー] 床/タモフローリング t=15mm 下地ベニア t=15+15mm 壁/LGS下地調湿ボード t=12+12mm ガラスクロスEP 天井/ガラスクロス光天井

[橋の回廊] 床/タモフローリング t=15mm 下地ベニア t=15+15mm 壁/ガラスカーテンウォール 天井/ 鉄骨の上耐火塗装 OP [光の回廊] 床/タモフローリング t=15mm 下地ベニア t=15+15mm 壁/LGS下地穴あきケイ酸カルシウム板 t=8mm EP ガラスクロスEP アルミルーバー 240×65mm @300mm の上 天然木突板 t=0.4mm 天井/PC 板の上 フッ素樹脂クリア塗装 光壁/波佐見焼陶板 260×600mm [トイレ] 床・壁/ライムストーン t=20mm 水磨き仕上げ 天井/LGS下地+PB





1階平面 縮尺1/1,500



北側全景 General view from the north.

t=9.5mm+岩綿吸音板

設備概要

空調 方式/全空気方式 熱源/ガス機直焚冷温水 ×2基 ブラインチラー 氷蓄熱槽

衛生 給水/加圧給水ポンプユニット 給湯/個別 貯湯式電気湯沸器 排水/屋内合流式 屋外下水

道放流

電気 受電方式/3相3線6.6kV 1回線引き込み 屋内キュービクル方式 契約電力/500kVA 防災 消火/屋内消火栓設備 展示室・収蔵庫:ハロンガス消火設備 排煙/蓄煙方式 機械排煙方式 その他 非常照明 誘導灯 この長崎県美術館の特徴は、長崎港を望む、常盤・出島地区という環境にある。そして敷地内にある運河を横断し、さらに隣接する水辺の森公園と連続し、都市的空間にダイナミックに参加した点にある。敷地内を運河が横断しているという、世界に類を見ないこの特色ある敷地を「可能な限り市民に開放し活用する」という設計思想は、すでに観光名所のひとつに数えられるほどに成功している。

この長崎港に面した美術館の優れている点は、大きくふたつの点に要約される。ひとつは、この敷地と環境を理解した優れた専門家とのコラボレーションが成立していることである。荒廃していた環境を再生し、海、水辺の森公園、運河との関係性を新たに掘り起こし、地区全体を美術館という有効な機能を軸に地域再生を果たしていることは、コラボレーションの成果によるものである。そしてふたつ目については、来館者の圧倒的多さがそのすべてを語っている。聞くところによると、環境との一体的整備ということもあって、この美術館の出現によって市民のライフスタイルが大きく変わり始めたとのことである。これこそ地域と密着した建築の本質を表している。

特に常設、企画展示室以外のエントランス・ホールや教育普及機能、ギャラリーなどは県民には自由に開放され、「都市のリビングルーム」としての役割が示されている姿はこの美術館の最大の成果であろう。さらには水際空間、屋上の公園空間、周辺の緑とのネットワークを構築するなど、美術館全体が回遊性を持ちながら、単に美術館の主題である「展示空間」や「収蔵機能」を主張するのではなく、運河という敷地特性を逆手にとって、建築の内外にさまざまな回遊性を発生させて、この美術館が、都市とアートのインターフェース(接続、交流)となる役割を明確にあらわしている。

このような美術館としての成功は、美術館側の日常的な企画力もさることながら、建築としての環境とのあり方を考えた、さまざまな素材(石やセラミック、木材、鉄)の利用の巧みさやディテールの開発などによって、透明性と軽快性を生み出している点に負うところ大である。特にキャンティレバー(片持ち梁)のPC(工場で製作されたコンクリート)床版や石のルーバー(羽根状の板)、さらにはガラスによる建築的構成が、ともすれば重くなりがちな美術館という空間に軽快な性格を与えているのは、設計者としての力量を感じさせられる。

強いて言えば、運河を挟んでギャラリー棟と美術館棟を繋ぐ34m スパンの橋の回廊の天井キールトラス(トラス状の竜骨)は、カーテン・ウォール・マリオン(方立式全面カーテンウォール)による吊り床 構造を生み出しているとはいえ、その巨大な構造体が全体の軽快感 を明らかに損なわせている点はそれがこの美術館の主題的役割を 持っている場所だけに残念に思われる。 The Nagasaki Prefectural Art Museum is located in a distinctive environment, the Tokiwa/Dejima district which overlooks Nagasaki Harbor. The museum participates dynamically in the urban space, straddling a canal and forming an extension of the adjacent Mizubeno-Mori Park. The architect's idea—to open to the public and utilize as much as possible this unique site bisected by a canal—has made the museum a successful tourist attraction.

Broadly speaking, this museum facing Nagasaki Harbor has two virtues. First, it was the product of a successful collaboration with experts highly knowledgeable about this site and environment. Thanks to that collaboration, a once-devastated environment was restored, a relationship between the sea, Mizube-no-Mori Park and the canal was reestablished, and the entire district was effectively revived around the function of an art museum. The second virtue is obvious in the large numbers of visitors to the museum. The construction of this museum and the coordinated improvement of the environment are leading to major changes in people's lifestyles. That shows how firmly rooted the building is in the district.

The fact that facilities other than the permanent and special exhibition spaces, such as the entrance hall, education functions and gallery, are open to the public and serve as an "urban living room" is the museum's biggest achievement. Moreover, this museum clearly expresses its role as an interface between the city and art. With its waterside spaces, park space on the roof and close relationship to the surrounding greenery, the entire museum has the character of a stroll garden. Instead of simply expressing a museum's primary function, which is to exhibit and store artworks, this work takes advantage of the unique condition of the site to generate both inside and outside the building many of the qualities associated with a stroll garden.

The work owes a great deal of its success as an art museum to not only the day-to-day planning ability on the museum side but ideas about the nature of the architectural environment, that is, the transparency and lightness generated by the skillful use and detailing of materials (such as stone, ceramic, wood and steel). In particular, the architect's ability is apparent in the way cantilevered precast concrete floor panels, stone louvers and architectural compositions of glass make the museum, a type of space that is apt to be heavy, light in character.

If pressed, one might question the use of a keel truss in the ceiling of the 34-meter long bridge over the canal connecting the gallery wing and the museum wing. Although the use of the truss makes it possible to suspend the floor of the bridge by means of curtain wall mullions, the enormous structure is clearly at odds with the lightness of the rest of the building. This is regrettable precisely because the bridge is one of the focal points of the work.